

「はあ……」

私は落ち着かない気持ちであえて携帯電話を持って日付を確認した。

二〇二二年、六月、十五日

変わらないように堅固に輝いている日付は私を一層憂鬱にさせた。

ビルをかき分けて入ってきた風のせいで、視野の外の青い光の髪はため息をつかめというように舞い散った。

君は今までよくやってきたし、これからは他の人に任せて退けばいいんだよ。そう言うようだった。

結局私は心を引き締めて頭を上げて私が入る建物を眺めた。

建物には「ウェブブラウザ」と書かれていた。多分、私がまたあの建物に入ることはないだろう。

そう思っただけは身なりをもう一度整えて誰よりも重い足を運んだ。

今日が私の最後の日だ。

私の名前は  
インターネットエクスプローラーだ。

「おっす、インエク先輩！」

エレベーターから降りて席に入る前に会ったのはサファリだった。

私に似た水色の髪の毛に赤と白のツートンのネクタイ

をしている、人気がなかったら、一発殴りたい外見だった。

口元は柔らかく曲がっているが、目は笑っていない顔なので、私はただの「サイコ」と呼んでいる。

「ああ……君か……」

私は憂鬱な顔をしてサファリを無視し通り抜けようとした。

「まあ、何入ろうとしているんっすか。最後の日なんだけど、終わってお酒でもどうっすか？」

サファリは私の気持ちを知っているのか分からないのか、にこにこ笑って肩を組んできた。

「はあ……このサイコ……今日だけでも僕をほっといてよ……天気も悪くて気持ちもあまり良くないんだよ」

天気の良いじゃないけど。

するとサファリは傷ついたように私から落ちて首を横に振った。

「サイコだなんて……本当に名残惜しいっす。どうせなら『IOS専属ウェブブラウザ』と呼んでくれっす！」

と言って、自分のきらめくような名札を誇示するようにつまみ出した。

「それは……おめでどう……うん……す……何て言

うか……すごいね……」

「まさにそうっす。いや、本当に私の人生はすごいんじゃないっすか！」

「ああ、今になって分かった。

このサイコは私の心情を正確に分かっていない。

私はサファリが自分の人生に関する一場の演説をする前に名札を奪ってゴミ箱に投げ捨てた。

サファリは突然の状況変化を受け入れられず凍っているが状況を把握してゴミ箱を握り締めて悲鳴を上げた。

「うわあっ！ 私の『IOS 専属ウェブブラウザ名札』があああ！」

急いでゴミ箱をあさり出すサファリを情けないように見下ろして、自分の席に歩いて行った。

「朝から力が抜けるね……。」

席にどっかり座って伸びをすると、横に誰かが来て挨拶をした。

「おはようございます。インターネットエクスペローラ——先輩」

「……あなたは本当に発音がいいんだね？ 呼びにくいから、先輩って言えって」

「いえ、私はこの呼び方が楽ですよ。」

隣には私の後輩、エッジが二杯のコーヒーを持って立っていた。

根は緑色で始めればするほどほのかな青色が漂う端正なショートカットの新社会人のような感じがする私が一番大事にしている後輩だ。

「コーヒーをどうぞ。すみません、最後の日なのに私をもっと面倒見なくてごめんなさい……」

「いやいや。僕はお前が淹れてくれたコーヒーが一番好きなんだ。いつもありがとう」

「先輩……」

「一つだけ、ただ一つ気に入らない部分は……。」

「オーイ、エッジ！ 私のためのコーヒー？ サンキュー」

あの姿も見たくないクロームめと顔が怖いほどそっくりだということ！

「あつ、クローム先輩、これはその……」

「もしかして私のじゃない……お？ IEじゃない？ 今日は遅くないみたいだね。最終日だからかな？」

やつは私を発見するや否や、にやにや笑いながら私の

席の机に腕をかけて声をかけた。

赤、緑、黄、青に染めたくせ毛は私を一層怒らせた。

「何言ってるんだ、いつも遅れたわけじゃないって、そして残念だけど、このコーヒーは私のものだよ。お前は早いかからお前が淹れて飲めばいいじゃないか」

私は隠さないように怒ってエッジのコーヒーカップをひっくり返して一口飲んだ。

すると、クロームは鼻の先であしらいながら意気揚々とした表情で腕を組んだ。

「いつも遅くはなかったけど……。遅れるのはいつも君だった。そうじゃない？ そんなに遅くなって、ウェブブラウザっていうもんか。まあ、明日からはそうじゃないけど」

「この……！！」

からかう笑い者を見て、私はこぶしを握り締めて立ち上がろうとした。

するとエッジが私をつかまえて天使のような目で私を眺めた。

ああ……そうだね、後輩は前なのに興奮しちゃダメだよ。私はこぶしをほどいて身なりを整えた。

「そうだね……私が遅れるのは事実だよ。ところでそれがお前と何の関係があるんだ？ 余計な関心を落とすて、消えていただけませんか」

よし、冷静に対処したよ！

そう思つて、もう一度仕事をするためにキーボードに手を上げると、奴が余計な言葉を付け加えた。

「ああ…そうだね。でもお前の人気がなくなって僕が仕事を全部抱え込んでるじゃん。本当に手が十個でも足りないから。まあどうせ君がいなくなったからといって何にも変わることはな」

奴の言葉はもう続かなかった。

なぜなら、私が握つて振り回したキーボードに正確にあごを打たれて倒れたからだ。

その日クロームサーバーは爆発して一日中使えなかったという。どうしてだろう……

「ごめんね……」

私は頭を上げることができず、エッジに謝罪した。

「ち、違います！ クローム先輩がひどかったんです。ウェブブラウザになくてもいいという言葉はタブーじゃないですか」

エッジは慌てて気後れした私を慰め始めた。先輩が先輩を慰める光景……この姿がもつと惨めになった。

そうだ。なくてもいいウェブブラウザは、誰も探さない寂しい人生なのだ。

そのように消えたウェブブラウザを何度も見てきた。

「……すまない。エッジ……最後の日なのにこんな情けない姿を……」

「何を言っているのですか。先輩は私の永遠の先輩じゃないですか」

「そうだね……エッジ……私がいなくてもきつと一生懸命生き残ることを願うよ……」

「心配しないでください。先輩が残したもの、私が必ず続けていきます！」

ああ……まさに天使の姿……今日だけはあいつに似た顔が天使のように見える……

「ありがとう……もうそろそろ荷物の整理をしなきゃ……」

「あ、それじゃ私がお手伝いします！」

「いや、私の荷物だから最後に私が整理したい。君は処理することも多いじゃん」

「あ……はい！ わかりました！」

エッジは私の気持ちを知ったのか、けたたましく敬礼して自分の場所に戻った。

私は箱に私のすべての荷物を整理し始めた。

初めて人々に姿を見せた日の写真から今までの変わったバージョンの資料、エッジを初めて会った時に書いておいたメモまで。

そうやって思い出に浸って、一つ二つ箱に入れていたら、誰かが私のそばに近づいてきた。

「よ、エクスペローラー、最後の荷物の整理？ ここに全部入る？」

首を回すとオレンジ色のストレートの髪型を背中まで垂らしたファイヤーフォックスが私の箱をちらつと見ていた。

「あ、フォックス。まあ、仕事の時に使っていたものだから。必要なものはエッジを渡せばいいんだ」

私の唯一の入社同期、あらゆる経験をしたフォックスと話しているので、思わず心が楽になった。

最初は競争するかのように食いちぎった仲だったが、憎らしい情に満ちていつの間にか誰よりも親しい間柄になった。

「結局、私が先に辞めるとは。これは私の負けだと思ってもいいよね？」

「何が負けなんだ。ただ先輩たちに席を譲るだけだ。そう思うよ」

「やっぱりそうだよね。君とは話が通じるね。後でもまた会ってお酒でも飲もう」

「ははは、あの時は私がおごらないと。私が休みになったら必ず連絡するよ」

昔から思っていたが、本当に優しい友達だ。我々が二十七年間も争ってきたが、まだ緊密な理由はこれだろう。私たちは昔のようにお互いの拳にぶつかって小さく笑って見せた。

「これでもう本当に最後だね……」

すべての荷物をまとめてがらんとした机を見ると、本当に最後の日であることが実感された。私の任務は他のウェブブラウザに移る。私は今までやってきたことがあるので、特に後悔はない。しかし、結局言及されず、次第に忘れられるのは少し怖い。

今まで私が努力してきた結果がなくなって誰かに隠れたら……

そうやって机をにらみながらじっと考えていたら、誰かが私の背中をポンポンと叩いた。

後ろを振り向くとサファリ、エッジ、クローム、ファアフォックスが立っていた。

「インエク先輩、何をそんなに一人で落ち込んでいるっスか！ 今まで頑張ってきたのではないっスか。もう私たちに任せておいてくださいっス！」

「そうです！ インターネット 익스プローラー先輩の苦勞は私たちが絶対忘れずに続けていきますから！」

「まあ……IEに私がひどいことを言ったけど……私たちもIEほどできるから。心配はやめてほしい。」

「そうだね、 익스プローラー。君が今までやってきたことを人々がいつまでも記憶するだろう。自負心を持った方が良い！」

思わずみんなの前で涙が溢れ出した。

この仕事に終わりがあるとは思わなかった。いや、終わらないと思ったと言うのが正しいだろう。いつまでもウェブブラウザとして人々に使われるようになると思っただ。しかし、いつも終わりはある。すべては失われるものだ。

その感情を大事にして進むことが結局成熟とつながるのではないか。

私は赤くなった目元をこすりつけて荷物をまとめてみんなの前に堂々と立った。

「ありがとう、みんな。私の後を継いで頑張ってもらいたい。特にエッジ、時々止まる習慣を直して」

「はい！ 分かりました！」

「なんだ、 익스プローラー。最後まで後輩をからかうの？ 心配しないで行って大丈夫」

「うん、それでは行ってみます！ みんなバイバイ！」

私はできるだけ明るい表情でみんなを背にして出口に向かって歩いた。

この出口を出れば、私はもうウェブブラウザではないだろう。

しかし、関係ない。私に代わるウェブブラウザはすでにあるし、ただ私の役割はここまでということだから。

そう思って私は身なりをもう一度整えて誰よりも軽い足を運んだ。

今日が私の最後の日だった。

私の名前は インターネット 익스プローラーだった。